

寶永三年版複製

本邦語園

上

古典文庫

寶永三年版複製

本邦語園

上

古典
文庫

古典文庫 四四五冊

昭和五十八年十月二十日発行

非売品

園

解説者

倉くら

島しま

節ふし

尚ひさ

語

<上>

発行者

吉

田

幸

一

本

印刷者

帝都印刷製本株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 (九一〇) 二七一七
振替口座東京九一四五九七番

『本朝語園』
解説

倉
島
節
尚

一 はじめに

『本朝語園』（十卷十二冊、宝永三年（一七〇六）刊）は、『語園』（二卷二冊、桃華老人一条兼良作、寛永四年（一六二七）刊）、『新語園』（十卷十冊、浅井了意作、延宝九年（一六八二）刊）、天和二年（一六八二）刊の流れを汲み、諸書から故事・逸話・奇談等を抜き出し、集めたものである。『語園』は漢籍に出典を求め、『新語園』もそれに倣ったが、『本朝語園』はその名の如く、『日本書紀』をはじめ『三代実録』・『古今著聞集』など、わが国の書籍にその典故を求めている。全部で五四九話を収め、後述（二の七）のような部立てで分類排列されている。漢字片仮名混り文で記され、漢字にはかなり丁寧に、片仮名で振り仮名が施されている。

序文に「孤山居士序」とあるが、孤山居士が如何なる人物か未詳である。百余種ののぼる出典書目を掲げていることから、博覧の人であったことが想像されるのみである。

二書 誌

ここに複製した醉生書菴蔵『本朝語園』（宝永三年二月梓行）全十卷十二冊の書誌的諸事項を記しておく。

(一) 装丁

袋綴装。縦二六・三 cm ×横一八・四 cm 。藍表紙。

(二) 題簽

表紙左肩、子持野囲み、縦一八・七 cm ×横三・八 cm 。

「本朝語園 一（一四、五之上、五之下、六九、十之上、十之下終）」

(三) 内題

「本朝語園卷第一（一）卷第九、卷第十大尾」

(四) 尾題

「本朝語園卷之一（一）卷之七、卷之八終、卷之九、卷之十大尾」

(五) 柱刻

卷一 「本朝語園序 一（一）」「本朝語園卷一 初・二（三十二終）」

卷二 「本朝語園卷二 一（二十）」

卷三 「本朝語園卷三 初・二（三十五終）」

卷四 「本朝語園卷四 初・二・一（二十）・廿一（廿九）・三十・三十

一・卅二（卅四終）」

卷五 「本朝語園卷五 初・二（三十六終）」

卷六 「本朝語園卷六 初・二（三十四終）」

卷七 「本朝語園卷七 初・二（三十四終）」

卷八 「本朝語園卷八 初・二・二・三（十九）・廿（廿八）」

卷九 「本朝語園卷九 初・二（三十四終）」

卷十 「本朝語園卷十 初・二（四十八大尾）」 四十九丁目には柱刻なし。

(六) 丁付・丁数

卷一 序（一）（二）、目錄（初）（二）、本文（三）（三十二終）、計三十四丁

卷二 目錄（一）、本文（二）（二十）、計二十丁

卷三 目録（初～二）、本文（三～卅五終）、計三十五丁（卅五終ウは白）

卷四 目録（初～二）、本文（一～三十四終）、計三十六丁（三十四終ウは匡郭と尾題のみ）

卷五上 目録（初～二）、本文（三～八）、計八丁

卷五下 本文（九～三十六終）、計二十八丁（上下合せて三十六丁）

卷六 目録（初～二）、本文（三～三十四終）、計三十四丁

卷七 目録（初～二）、本文（三～三十四終）、計三十四丁（三十四終ウは白）

卷八 目録（初～二）、本文（二～廿八）、計二十九丁

卷九 目録（初～二）、本文（三～三十四終）、計三十四丁

卷十上 目録（初～三）、本文（四～二十一）、計二十一丁

卷十下 本文（二十二～四十八大尾）、刊記（後ろ見返しで、丁付なし）、計二

十七丁と見返しの刊記（上下合せて四十八丁と見返しの刊記）

(七) 匡郭・本文

四周单边、縦二〇・〇*cm*×横一四・五*cm*。一面十一行。一行に二十二～二十六

字で、二十三、四字のことが多い。

漢字片仮名混りで記され、振り仮名も片仮名。

(ハ) 話数・部立て

卷一 五五話 テンチ ツケタリシレイ 天地 附 時令 テイワウ 帝王 附 官姓 クハンシヤウ

卷二 二七話 ジンシン 人臣 カウシ 孝子

卷三 六六話 ワカ 和歌

卷四 七〇話 シブン 詩文

サイチ 才智

卷五 六六話 (上 一七話、下 四九話)

ホウレイ 法令 ショジャク 書籍 ヒツセキ 筆跡 ショグワ 書畫 ザフグイ 雜藝

卷六 四三話 ブユウ 武勇 附 ギヤクシン 逆臣

ガウリキ 強力

卷七 五〇話 イワンセンサウ 醫陰占相

クハンゲン 管弦 附 ザウシ 雜事

卷八 四六話

隱幽 インユウ

好色 コウシヨク

無常 ムジョウ

卷九 四五話

飛仙 ヒセン

釋門 シヤクモン

卷十 八一話

(上 三一話、下 五〇話)

天神地祇 テンジンヂギ

神感 託宣 祭祀

崇咎

恠異妖靈 ケイ エウレイ

獸蟲 シウチュウ

艸木 サウモク

附器物 キブツ

計五四九話

(九) 刊記

第十二冊目後ろ見返しに、

「寶永三丙戌年二月吉辰

梓行

京都三條通升屋町

出雲寺和泉掾

江戸日本橋南一丁目

同 店」

(十) 印記

「岩名藏本」「馬場文庫」「黄雲白雪邨舎」

三 出典および諸話の伝承関係

(一) 出典

『本朝語園』の編者はかなりの数の話に出典を記している。それぞれの話の伝承関係は後述するとして、ここには編者が出典として記しているものをそのままに、話数の多い順に並べてみる。この中には出典を誤まっているものもあるが、一応記されたままに数えておく。

出典を示す場所に「同」と記されているものは、その直前の話と同出典である

とした。ただし、直前の話に出典の記されていないものがあり、これは出典ナシに加えた。また、話数が同じ場合は、原則として作品名の五十音順に並べた。

一話に出典が二種類併記されているものは、それぞれの出典に数えた。括弧の中の数字は二種類の出典が併記されている話の数で、上の数の内数である。

なお、数字の下に注記は、出典の作品名が異表記や略称などで記されているものを示した。

日本紀 五二

うち、神代巻とするもの五。

三代実録 二二(二)

古今著聞集 一八(二)

著聞・古今著聞・著聞集などとも。

続古事談 一八

今昔物語 一五(二)

十訓抄 一三(二)

袋草子 一一(三)

袋艸帑・囊艸子・袋艸子・袋草紙・囊艸紙などとも。

東鑑	一〇	
元亨釈書	一〇	
江談抄	九	
天文雜説	八	うち、天文雜記とするもの四。
古事談	六(二)	
神社考	六(二)	
続日本紀	五(二)	
世継	五	うち、世続物語とするもの一。
隱逸伝	四	
暁筆抄	四	うち、摺 ^(ママ) 鴨暁筆抄とするもの一。
本朝一人一首	四	うち、一人一首とするもの一。
宇治拾遺	三(二)	
源平盛衰記	三	
古来小説	三	

本朝列女伝	二
保元記	二
東見記	二
徹書記	二
治聞集	二
太平記綱目	二
撰集抄	二
公卿補任	二
鎌倉大草子	二
本朝文粹	三
本朝医考	三
徒然草	三
人史	三
釈日本紀	三

寂莫艸とも。

鎌倉大艸子とも。

徹書記物語とも。

大和物語 二

以下は、一話だけに出現として記されている作品である。

赤染記	伊勢日記	嚴島縁起	宇治大納言記	栄花物語
奥羽軍記	大鏡	大倭姫世紀	御室和書目錄	画史
歌道鈞物	義堂	清輔雜談集	桐火桶	舊事記
行狀記	禁秘抄	公事根元	玄翁伝	源語秘決
江記	古今真名序(二)	高名録	私語	史館茗話
社記	砂石集 ^(マヤ)	集義和書	將軍家譜	掌中曆
性靈集	新後撰和哥集	図絵宝鑑続編伝	井蛙抄	清巖茶話
醒眠記	善隣国宝記	雑々拾遺	続本朝文粹	篁之記
橘氏系図	徒然艸裏書	徒然草抄	土佐日記	敏行伝
難後拾遺(二)	難太平記	二条殿日記	日本紀裏書	日本後紀
寢覚記	百人一首抄	扶桑略記	風土記	本朝遯史
万葉集(一)	万葉集仙覚抄	御堂関白寛弘二年御記		遊仙窟跋

承久記

要筆伝

李部王記

連哥新式大抄 連集良材

朗詠註

朗詠江註

和漢合運

右のとおりで、編者が出典として記した作品は一〇三種（『徹書記』と『清巖茶話』を『正徹物語』の上下と考えれば一〇二種）におよぶ。

また、編者が出典を記しているのは三二五話、そのうち七話には二種の出典を併記している。出典を記していないのは二二四話である。

(二) 諸話の伝承関係

前条で述べたように、『本朝語園』の編者は六〇パーセント近くの話に出典を記している。これを可能な限り再確認し、併せて他の作品に収められている同話・類話を捜し、できることならば出典の記されていない話の出典を明らかにして、諸話の伝承関係をさぐってみたいと考えた。これまでに筆者が行った若干の調査の結果をまとめたのが、次の表である。

上段に標題を記し、その下に三つの欄を設けた。

第一欄は、『本朝語園』の編者が出典として掲げた書名である。書名の下に×

印を付けたものは、筆者が調べた限りでは、その作品の中に該当する話が見当たらなかったものである。また、△印を付けたものは、本稿を成すまでに調査することのできなかつた作品である。

第二欄は、同話の収載が確認できた書名である。◎印を付けたものは殆んど同文と言ってよいほど近いもの、○印を付けたものはかなり同文的なもの、・印を付けたものは一部が同文的なものである。ただし、その判定は、かなり主観的なものであることをお断りしておく。なお、漢文で書かれた作品は、その訓読文と比較した。

第三欄は、類話を収載している書名である。同材の話で、文章や話の展開の順序が違ふものなどを、便宜この欄に入れた。

標題と第一欄は編者の表記をできるだけ尊重したが、第二欄と第三欄では書名に適宜略称を用い、字体も通行のものによった。

なお、標題上の説話順番号は、便宜上複製本文に私に付けたものである。